



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第19主日 B年(2021年8月8日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記上 19章4—8節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 4章30節～5章2節

福音朗読：ヨハネによる福音 6章41—51節

## いのちをいただく

三つの朗読から

第一朗読の「<sup>た</sup>食べ物に<sup>もの</sup>力づけられた<sup>ちから</sup>彼は<sup>かれ</sup>」(8節)に注目<sup>ちゅうもく</sup>しましょう。食べ物<sup>い</sup>は、生きるために必要な<sup>ひつよう</sup>ものです。しかし、日常の生活で食べ物に力づけられて生きる<sup>けつだん</sup>決断をすることはあまりないでしょう。神さまがくださる食べ物<sup>あゆ</sup>は、わたしたちの人生の歩みを力づけ<sup>みちび</sup>て、導いてくれるのです。「起きて<sup>お</sup>食べよ<sup>た</sup>」(5、7節)の命令<sup>めいれい</sup>は、<sup>つか</sup>疲れているわたしたちを<sup>ふ</sup>るいたさせる神の言葉です。

第二朗読の最後の言葉<sup>さいご</sup>「<sup>ことば</sup>キリストがわたしたちを<sup>あい</sup>愛して、御自分を<sup>かお</sup>香りのよい<sup>そな</sup>供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために<sup>ささ</sup>神に<sup>ささ</sup>献げてくださったように」(2節)は、わたしたちのいのちの姿<sup>すがた</sup>を<sup>おし</sup>教えてくれます。つまり、イエスさまがいのちを<sup>ささ</sup>献げてくださった。そのいのちでわたしたちは生きるのです。

福音朗読にある「父<sup>ひ</sup>が<sup>よ</sup>引き寄せてくださらなければ<sup>あじ</sup>」を<sup>あじ</sup>味わいたいです。「引き寄せる」はギリシア語でヘルコーと言います。「力づくで、自分<sup>ほう</sup>の方に<sup>ひ</sup>引<sup>ひ</sup>張<sup>ば</sup>ってくる」ことを意味するとても強い表現です。信仰<sup>しんこう</sup>は、その人のいのちをかけた<sup>けつだん</sup>決断から生まれます。これは確かです。しかし、決断の前に神さま側<sup>がわ</sup>からの<sup>かか</sup>関わり、<sup>か</sup>介入<sup>かいにゆう</sup>がなければなりません。神さまは、わたしたちをイエスさまの方へと引き寄せてくださるのです。そのことに気がついて、初めて人は信仰<sup>しんこう</sup>の<sup>か</sup>決断<sup>かう</sup>が可能となります。神の介入と人間の決断。この二つの点から信仰<sup>しんこう</sup>は<sup>な</sup>成<sup>た</sup>り立<sup>た</sup>つのです。

## 説教

福音朗読の47節から51節を見てください。ここでは「パン」という単語が五回も繰り返されます。こうして、話のテーマはイエスさまがどなたであるかへと転換します。イエスさまは「命のパン」なのです。この部分を次のような構造に分析できると思います。

- a 信じる者は永遠の命を得ている。わたしは命のパンである
- b あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった
- b' これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。
- a' わたしは天から降って来たパンである。これを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。

49節「荒野でマンナ」と50節「天から降って来たパン」が対となります。一方は食べても死ぬが、他方は食べても死ぬことがないです。フランシスコ会訳の注釈では、肉体的な死と霊的な死が対比しているという説明がされています。しかしこれでは、まるで二つの死があるかのような印象を受けますので、あまり適切な説明ではないと思います。上の分析でbとb'は「死の観点」から述べられているのに対して、aとa'では「命の観点」から述べられています。

イエスさまは人に命をあたえる方です。それは、イエスさまご自身がご自分の肉をこの世に差し出して、死んだからです。わたしたちのいのちは、わたしたちに代わって死なれた方のいのちをいただいて、あるのです。



パウツ 『キリストの哀悼』1460年